

食品産業のGAPの取り組み拡がる

農場から食卓まで、安心・安全を届ける

最近、食品産業が自社農場でJGAPに取り組んでいるケースが良く見られる。契約農場に対してもJGAPの取り組みを勧め、社員がJGAPの指導員として農場を指導しているケースもある。以前から緑茶飲料で有名なハラダ製茶や伊藤園がJGAPの取り組みをしていることは小紙で伝えた。また、カット野菜、業務用野菜のサンポー食品(株)(本社京都市)は、自社農場と契約農場と団体でJGAP認証取得へ向け取り組んでいる。農業生産法人有限会社サンポーファーム(千葉県館山市・南房総市)は、レタスやキャベツなど業務用野菜の生産管理を自社規格・基準からJGAPの生産工程管理へ移行している。工場は既にHACCPを導入しているが、農場もHACCPの考え方を導入するためJGAPに取り組んだ。同様に青果物の生産委託、青果物の加工及び、カット野菜の製造販売をしている北海道の(株)グリーンパートナー(北海道豊頃町)は、安心・安全な青果物から食品加工まで一貫したサービスをモットーに、イエスクリーン(道認証)、エコファーマー(道認証)など特別栽培の取り組みから栄養価へのこだわり、環境問題に取り組んでいる。さらにJGAPへの取り組みも始める。

九州唯一の総合スパイスメーカーのヒビキ・スパイス(本社東京)は主力製品を中心にして、生産履歴が分かるもの、すなわち顔の見える商品(原料)の取り扱いを行っている。そのために、原料買い付け前より、栽培管理表や使用農薬リストなどの情報の提出を求め、栽培時管理状況の確認を行い、提出書類を基に同社管理システムによりそれらの情報をまとめ、製造品のロット番号から原料情報までを遡って追求できるような体制(トレーサビリティ)を構築している。更に安心と安全を届けるために、青森の自社農場でJGAP農場の指導によるニンニク栽培に取り組み、JGAPの導入を図っている。ヒビキ・スパイスでは食品メーカーとして安心して使える、安全な食材を届けたいと、今まで以上に厳選し徹底的に管理の上検査をした原料のみを使用、幾つものチェック項目をクリアした製品だけを出荷しているという。



青果会社のJGAPの取り組み — 全員参加の研修会で生産者を啓蒙

九州では、青果会社や出荷組合でもJGAPの取り組みが始まっている。(株)松尾青果(長崎県島原市)は、今年8月自社農場(農業生産法人(有)ポテトの里)でJGAPの認証を取得した。今後、更に周辺の契約農場と団体認証へ向け取り組みを始めている。長崎青果移出組合の傘下青果組合でもJGAPの勉強会が始まり、団体認証へ向け取り組みを始める。また、宮崎県の大手青果会社は、先ず自社農場でJGAPに取り組み認証を取得し、更に数十名の仲買人に対する研修(意識改革)を実施、そして全契約農場にJGAPの取り組みを勧めたいと考えている。

一般的にJA等生産組合や青果会社は、近隣の農産物から残留農薬が検出され食品事故として大きくニュースになると、自分たちの農産物では無いとしても、その後消費地の東京や大阪、名古屋等の市場から同産地の農産物の注文が来なくなり、風評被害で数か月、場合によってはブランド農産物そ

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

のものが無くなる程売り上げが落ちるケースがある。さらに生産者は残留農薬に過敏になり、農薬の使用を異常なほど控えてしまって、品質の劣化やクレームが続出し重ねて損害を被るケースや、逆に翌年は皆が注意して農産物の安全に気をつけても売り上げに繋がらない場合もある。かつて、ある産地のハウレンソウのダイオキシン事故で県内の野菜が売れなくなったり、ある県のブランドイチゴが販売不振に陥ったりした事例など枚挙に暇がない。このような事故があると、毎年安心安全な農産物作りの研修会が始まり生産者の啓蒙活動が行なわれる。高齢者(70歳代)の多い産地ほど意識改革が困難で、取り組まなければと思いつつも一歩が踏み出せていないのが実態だ。県GAPですら難しいと考える生産者が多い中、まだまだJGAPのハードルは高すぎるとい認識である。

異業種からの農業参入と食品会社とのコラボ

逆に、新規参入の農場(生産法人)は、JGAPは当たり前という感覚の経営者が多い。特に異業種から農業参入した企業は、最初から一般の生産者と感覚が異なる。建設会社の農業参入が各地で増えているが、企業でISOを導入しているとJGAPの理解が早い。耕作放棄地で土づくり作業をコツコツと教わりながらやっても、なかなか売れる農産物を作る迄に至っていない。栽培管理のノウハウの蓄積やシステム化に困っている。規格外の農産物が7~8割という農場もある。農産物のロスが多すぎ、栽培指導を求めている企業が多いと聞く。何を何時作り、どこに販売したら良いのか、上述の加工食品会社や青果会社と栽培指導力がありコーディネート力のある肥料商との連携が始まっている。

次世代農業ビジネス・マネジメント研修」2010年12月開講

農業のビジネス化と現場での人材育成ニーズに対応した、農業ビジネス研修の決定版「次世代農業ビジネス・マネジメント研修」(運営事務局:株式会社テクノアソシエーツ)が新たに2010年12月からスタートする。生産・流通・加工などの第一線で活躍する生産者やビジネスマン、技術者を講師陣に迎え、これからの農業ビジネスに必要な理論と体験知を、座学・実技・OJTを通じて体系的に学べるカリキュラムとなっている。

座学研修については、就農経験者向けとして農業ビジネスのプロフェッショナル・マネージャーを育成する「マネジメント・コース」があるほか、生産者と企業とのアライアンス・ビジネス・コーディネーターを育成する「コーディネーター・コース」の2コース。

座学研修(主催:日経BP社・「日経ベンチャー」経営者クラブ)

・「農業ビジネス・マネジメント・コース」(基礎研修:2011年2月21日開講)

・「農業ビジネス・コーディネーター・コース」

(基礎研修:2010年12月7日開講、実践研修:2011年1月6日開講)

【法人向け 連携プログラム】

基礎実技研修(協力実施会社:井関農機株式会社)

OJT研修(協力実施会社:協力農業生産法人各社)

早期申込み割引や団体割引もある。カリキュラム詳細については、下記ホームページに掲載されている。

「次世代農業ビジネス・人材育成フォーラム」

【URL】<http://next-nogyo.jp/>

日に日に寒さが増してきましたね。東京の木々も薄っすら紅葉してきました。美しい紅葉の条件には「昼夜の気温の差が大きい」「夏が暑く日照時間が長い」「夏に十分な雨が降る」「湿気が少なく乾燥している」などの条件が必要との事。今年は猛暑でしたが、各地の色づきはいかがですか?

編集局長:小田原次洋 アシスタント:助川尚子

電話:03-5802-2011/E-mail: macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>